R3（2021）年度　和歌山大学教育学部共同研究事業

小学校外国語科におけるパフォーマンス課題と評価の在り方に関する研究

尾上　利美（和歌山大学教育学部）・清水　奈穂実（海南市立亀川小学校）
井戸　壮太（海南市立亀川小学校）・山下　千香（海南市立中野上小学校）
辻本　隼也（海南市立亀川小学校）・山本　恵子（海南市立大東小学校）

１．研究課題について

本研究課題は、昨年度に引き続き、海南市立教育研究所「外国語科に関する研究部門」に所属する外国語部門研究員の先生方による効果的な指導法および評価の方法についての研究を総括し、さらに深化させることを目的とした。

２．取り組みについて

外国語部門研究員の先生方によって研究のまとめが夏に行われ、海南市教育研究会冊子として発行された。また、11 月 1 日（月）には、海南 nobinos ホールにて令和 3 年度海南市立教育研究所発表会が開催され、外国語研究部門の先生方が研究発表を、尾上は本研究の講評を述べた。以下は、研究発表および講評の概要である。

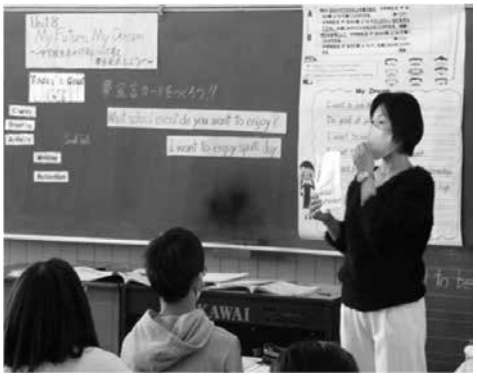
３．研究発表の概要（清水先生、井戸先生、山下先生、辻本先生、山本先生）

２年間の研究した概要を、以下の４点に沿って研究員が発表した。

（１）Can-Do リストの作成
（２）評価規準表の作成・「かんたん早見表　外国語　評価場面」の作成
（３）授業実践（中野上小・亀川小・大東小）研究授業の実施・検証
（４）海南抽出校児童アンケートの実施・分析

いずれの実践も本研究会の研究主題である「外国語を通して、自分の考えや気持ちを伝えることを楽しめる子の育成～Today's　Goal とルーブリックの明確化による主体的な学びの実現へ～」に向け、どのような成果が見られたのか、また今後の課題は何かを考察した内容であった。

特に、（３）授業実践の発表は次の通り各校から行った。



・中野上小学校

「子ども用 Can-Do リスト」の使用することで、児童の主体的な学びが見られたことと、令和２年２月２６日に 6 年生の Unit８の「夢カードをつくろう」の第５時限目において「書く」活動を取

り上げた提案授業について発表した。提案授業には研究員で作成した（１）（２）を活用したルーブリックの有効性やいかに児童に「A 評価をめざしたい」と思わせることができるかのアプローチやその児童の変容をまとめた。

・大東小学校

領域別の評価等実践と英語専科教員として提案授業 5 年生 Unit6 「What would you like?」、中学年での外国語への接続を意識した実践『Small　Talk』の充実の取り組みの 3 点について発表した。

・亀川小学校

提案授業 6 年生『Check　Your　Steps 1「亀川中学校の英語の先生に自己紹介をしよう」という小中連携での発表領域の実践と長期にルーブリックを使用した効果について発表した。児童とルーブリックを共有することで学習に対する意欲が向上することがわかり、長期的に同じルーブルックを使用することで、児童の内省が促進されより次への学習意欲を持つことが分かった。

このように各学校で各担任や外国語専科教員が取り組む中で、研究主題である～Today's　Goal とルーブリックの明確化による主体的な学びについて一定の成果があったことを報告した。

研究の概要（４）である海南市として児童の外国語に対する意識はどうであるかを、アンケート結果から考察した。アンケート対象は、共同研究員が関わる小学校の５、６年児童で、実施時期は、２０２０年６月と２０２１年の３月の２回行った。次の結果は、204 人の回答結果である。次がその概要である。

アンケートでは、「あなたは英語が好きですか。」の問いに対して、児童の６５％が、英語が「好き、どちらかといえば好き」と回答し、児童の９５％が「英語が使えるようになりたいですか」に対し「そう思う、どちらかといえばそう思う」と回答していることが分かった。また児童の７３％が、「英語の授業に進んで参加している、どちらかといえば進んで参加している」と回答している。約７割の児童は英語の授業に対して「好き」という気持ちをもって積極的に取り組む児童が多い傾向にあるといえる。しかし、英語授業が「どちらかといえば嫌い、嫌い」、英語の授業に「どちらかといえば進んで参加していない、進んで参加していない」と回答した児童が８％いることは課題である。ほとんどの児童が肯定的に英語の授業に参加している中で、教室の中の約１割の児童は否定的な気持ちであることがわかる。なお、児童の８３％が「英語の勉強が大切だと思う」と回答している。

特に、英語の「好き」と「楽しい」はどのように関係しているのかということにも注

目してアンケート分析を行った。結論から言うと、「英語の授業が好き、楽しい」と回答している児童のほとんどが、「英語の勉強が大切だと思う」と回答していることがわかった。「英語が好きですか。」に「好き」と回答した児童の内、９５％の児童が「英語を使えるようになりたい」に「そう思う」と回答している。また、「英語を使えるようになりたい」に「そう思う」と回答した児童の内、９０％の児童が「英語の勉強が大切だと思いますか」に「そう思う」と回答している。「英語の授業が好きですか。」に「好き」と回答した児童の内、９２％の児童が「英語の勉強は大切だと思いますか。」に対して、「そう思う」と回答している。

以上のように、各質問項目で英語が「好き」、授業の取り組みが「楽しい」など肯定的な回答をしている児童のほとんど（約９割以上）が「英語を使えるようになりたい」「英語の勉強は大切だと思う」と回答していることが分かった。アンケート全３３項目の内、１０個の項目が「英語の勉強は大切だと思うか」という質問と関係性があることがわかった。

このことから、児童が「英語の授業が好き」「楽しい」と感じるには、「英語の勉強が大切だと思う」かどうかが鍵だと言える。外国語科の授業では、教師が英語を学ぶ価値を語ったり、児童が学習活動を通して英語を学ぶ意味が実感したりすることが重要であると考えられることがアンケートから見えてきた児童の意識であった。

４．講評（尾上）

重点的に扱われた以下の４つの項目ごとに優れている点を示し、深化に向けた方向性について述べた。

（1）CAN -DO リスト の作成

・教材との関連（評価場面）が明示されている。

・Can-Do リストの到達目標を基に、子どもと共通理解していくための「子ども用 Can-Do リスト」を学年別で作成している。

・ルーブリックを児童と共有している。

教師だけでなく、学習する主体である児童が「何ができるようになればよいか」を理解しておくことで、そこへ向かっていこうとする気持ちや態度等が育まれる。これは、自律的な学習者が育つためにも必要であると考える。

（２）評価規準表の作成

・『New Horizon Elementary English Course』の各ユニットの「評価規準例」が作成され、また、一目でわかる「かんたん早見表　外国語　評価場面」が作成されている。

「評価規準例」によって、「記録に残す評価」と「目標に向けて指導はするが記録には残さない評価」との区別が明確になっており、各学校で使用をする際にも大いに参考になるであろう。「かんたん早見表　外国語　評価場面」は、年間そして小学校５・６年生で「何を」「いつ」見とるのかを見通すことができる。これは、「指導と評価の一体化」を実行するうえで非常に大切である。

（３）授業実践・研究授業の実施・検証

・中野上小学校

子ども達のワークシートや振り返り、ルーブリックなどの実物があり、どのように子どもたちの意欲が向上したのか、そのプロセスが明瞭であった。いかに「英語学習に対する漠然とした不安」を取り除き、「越えられる！」と子どもたちが思えるスモールステップを明示するか、そしてそのステップを子どもたちと共有することの大切さを見せていただいた。

・大東小学校

評価に用いたワークシート例や手順が示されており、今後の参考になるであろう。また、中学年の外国語活動と高学年の外国語科をつなぐために、様々な場面で英語に触れる機会を提供すること、身近な場面設定を行う工夫、Small Talk の工夫が行われた様子も記述されている。

・亀川小学校

実践①、実践②ともに、ワークシートの実例や児童の振り返り、児童と授業者の声がまとめられており、どのような実践であったのかがよく記述されていた。また、事例紹介やアン

ケートも、個別児童の変容と学年全体の変容がみえるまとめになっていた。

（４）児童アンケートの作成・アンケート実施・集計・分析

・2020 年 6 月と 2021 年 3 月にアンケートを実施したことで、子どもたちが「外国語科の授業」に対してどのような意識を持っているか等について、その時点での「今」とその「変化」が見えた。

アンケートの結果から見えてきたことをどのように手当していくかが、本研究を深化させる方向性であると考える。以下ではそれらのうち 2 点を取り上げる。まず、海南市教育研究会冊子には、「英語の楽しさについての意識」において、「『話すこと』に注目すると他の技能に比べて低い傾向にあることがわかる。」(p. 37)とあり、課題の一つとして挙げられている。「話すこと」は、話し手が一方的に話すという場面でなければ、「聞くこと」とセットになることが多く、「聞くこと」「話すこと」は、いずれもあっという間に消えてしまう音声を媒介に行なわれるという難しさがある。この難しさをふまえたうえで、「話すこと」の言語活動が児童の発達段階、学習段階、興味関心に相応しいものとなるよう工夫する必要がある。また、教師の目からは「できている」が、「できていない」と自己評価をする児童も中にはいることから、「これが出来たらいい」を具体的に示す、つまり、適切に自己評価をするための「ものさし」を児童の中に育てることも肝要であろう。次に、「アンケート調査から、児童が『英語の授業が好き、楽しい』と感じるためには、『英語の勉強が大切だと思う』かどうかが重要だということが分かった。」(p. 40)ということが指摘されている。「英語学習の意義」を子どもたちに明確に理解してもらうために、小学校、中学校、高等学校、そして社会に出てからという長いスパンで、英語学習の意義を見通せるような仕掛けがもっと必要ではないだろうか。例えば、Can-Do リスト、評価規準、ルーブリックなどを小学校と中学校で共有し、段階的に何ができるようになっているのか、また、到達点はどこにあるのかを、教師と児童・生徒が常に確認しながら学習が進められるような取り組みも一案ではないかと考える。